

空手道詳説（10）

第2章 沖縄史の概説

4 沖縄史の概略（その1. 琉球王国の成立）

この標題について、括弧書きを加えましたからご了承ください。

（16）三山時代の琉球

沖縄本島の勢力が三分化し、鼎立状態となったのは英祖王統（1228～1349年）第3代王の玉城（在位：1314～36年）時代で、1322年頃からというのが通説である。

右に分立の地域を示した沖縄本島の地図を先月に続き再掲するので、おおよその区分けを念頭におきながら読み進めていただきたい。

前項まで、各王統の成立と交替劇を述べてきた。舜天王統（1187～1259年）、英祖王統（1260～1349年）、そして浦添按司で二代56年間統治した察度王統（350～1406年）についてである。しかし、それらは主として中山の歴史であった。

それに、どの時代を取り上げても、琉球全域に支配力が及んでいたとは言い難い。

浦添の中山に対し、北山、南山と各地でそれぞれ地方按司を束ねる王（世の主）が現れ、三大勢力圏の形成が明確となった状態が三山対立（又は、三山鼎立）である。

三山が独自の歩みをする中で、先ず中山王の察度（在位：1350～95年）が1372年に明との朝貢関係を開始して傘下に入り、正規な外交ルートが生まれた。察度は留学生（官生）の派遣や閩人三十六姓帰化、宮古島の入貢（察度に対して）などの業績を残すが、その後は北山、南山ともに明と朝貢関係を結び、王の即位にあたって冊封を



受けている。明は、強大な国力を後ろ盾にした懐の広さから、三山それぞれを固有の王国として認証していた。

沖縄本島の面積は 1208 km² で、筆者の住む山形県内なら鶴岡市 (1311 km²) に満たず、県都山形市 (381 km²) の 3 倍強、酒田市 (602 km²) の約 2 倍であり、端から端までの距離にしても 106m という小さな島である。この狭い地域の中に三つの勢力が覇を競っていた訳で、何とも狭苦しい感は否めない。

三山が対立が続く約 100 年の間で、明に進貢したのは中山が 42 回、北山が 11 回、南山が 24 回と記録が残る。各山の王は、大国の明を意識した施政を余儀なくされるが、決して損な外交交流でなかった。

この朝貢回数と、各王の国力基盤と無関係ではない。後に述べる中山による北山侵攻、そして中山勝利につながった原因とも関連する。

中山については第一尚氏王統や、三山統一のところで触れることとなるので、北山、南山各王統について説明を加えておきたい。

ア 北山の王統

北山は今帰仁城を中心とし、主に国頭（くにがみ。島の北方、頭の部分）に存在し、南方角の鹿児島県与論島と沖永良部島も支配下に含まれていた。しかし、国頭地域は山原（やんばる）と呼ばれ、原生林に覆われた山間部が多いため、居住適地や耕作地に恵まれているとは言い難い。

14 世紀の初頭、今帰仁按司の帕尼芝（はにし、生年不詳～1395 年。在位：1322～95 年）が、周辺の羽地（はねじ）、名護（なご）、国頭（くんじゃん、くにがみ）、金武（ちん、きん）、伊江（いえ）、伊平也（いへや）の各按司をしたがえて建国し統治した。下の写真は、今帰仁城址である。



1383 年に永楽帝が琉球諸王国間の停戦を勧める奉勅を下し、併せて北山にも朝貢を命じた。これに応じた北山王の帕尼芝は、同年 2 月に初めて進貢し、その後、

明によって冊封され、1385年には駝紐鍍金印を下賜されている。進貢貿易によって潤ったといわれている。

資料によれば、建国した帕尼芝の在位期間は74年に及んでいる。これはいかに考えても現実味に乏しい。とすれば、何代かにわたって親子か親族が同じ名を襲名してきた可能性が浮かび上がる。

第2代王は帕尼芝の長男で珉（みん、生年不詳～1400年、在位：1396～1400年）であるが、実際には何代目の王なのか不明であるため、先代王・帕尼芝の長男ときり表現のしようがないが、一応第2代と記しておく。

今帰仁城は要害の地にあつて不落の城といわれ、武勇に優れた勇敢な武将を多数抱えていた。

第3代王は帕尼芝長男の攀安知（はんあんち、生年不詳～1416年）で、攀安知が北山最後の王となった。

イ南山の王統

一方、南山であるが、少なくとも14世紀の初め頃、大里按司の承察度（しょうさと、生年不詳～1398年。在位：1337～96年）が周辺按司を掌握しはじめ、その後建国した。承察度の名は、大里（うふさと）の当て字と解される。

承察度の在位は59年間に及んでいる。北山王の帕尼芝の場合と同様、親子など数代の王が襲名したと考えられる。

中山に遅れること8年、1380年初めて明へ進貢し、1385年に明皇帝より山南王として冊封を受けている。

大里王統の第2代王は汪英紫（おうえいじ、生年不詳～1402年。在位：1388～1402年）で、承察度の三男であったといわれるが、先代の承察度の叔父であったとも伝わるので、承察度が何代かにわたって襲名した名前であれば、父も兄も承察度であったことになる。但し、資料によれば承察度の在位は1395年まで、汪英紫の即位は1386年と重複期間があつて矛盾するが、即位時は承察度名で、後に汪英紫を名乗ったのであろう。

第3代王は、汪英紫二男の汪応祖（おうおうそ、生年不詳～1413年。在位：1403年～1413年）である。

汪応祖の長子・他魯毎（たるみい、生年不詳～1429年。在位：1413～29年）は、父の汪応祖王がその兄達勃期（たふち）に殺害されたため、諸按司と協力してこれを撃ち、第4代王となった。1415年、山南王として明の冊封を受けている。

このように4代にわたって南山王統は続いたが、1429年に中山の巴志に滅ぼされ、他魯毎が南山最後の王となった。

(17) 巴志による北山攻略

佐敷按司だった巴志（1372～1439）は、察度王統の武寧を滅ぼし、第一線を退いていた父の思紹（1354～1421年、在位：1406～21年）を初代王に即位させた。

南山の最高権力者（王）は大里大親（うふさと ううふ）であったから、佐敷按司はその配下である。それにも拘らず、察度王統を倒して中山王となった経緯には、財力と信望を集めて力を蓄え、南山の一勢力で終わりたいくないという野望を明確に窺うことができる。

覇権を握った新興勢力の巴志は、舜天王（しゅんてん、在位：1187～1237年）時代に築城が始まり、舜天、英祖、察度の3王統が200年余にわたり王城として使ってきた浦添城から出て、首里を王府にすると定めた。

浦添城は、土台を隆起珊瑚礁の断崖上に築き、東西約400m、南北約80mで、北は急崖をなしているが、南側は緩斜面であるが堅固な城であった。

それにも拘らず、首里に築城を開始したのは、南山の大里按司から少しでも離れ、全島的な将来展望を踏まえ、中心地となり得る場所を選んだものと思われる。

父を王位に就けた巴志は、1322年以来長く抗争が続いてきた三山対立状態から統一への決意を固め、勢力の増強を図っていく。

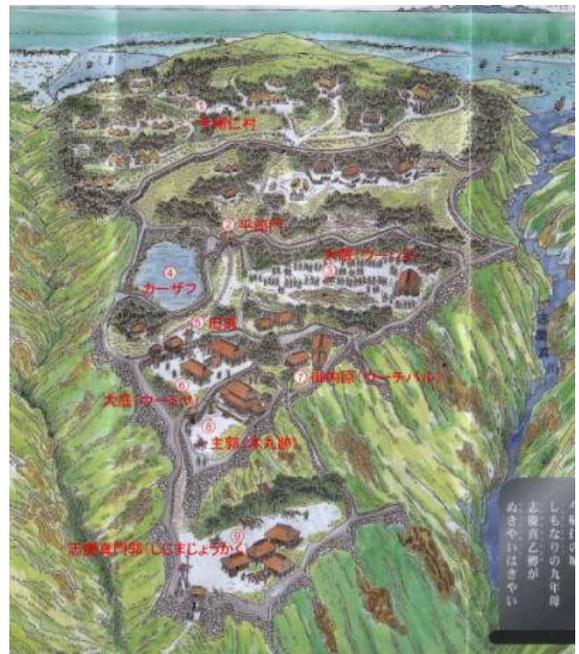
巴志が最初に着目したのは、難敵の北山討伐であった。武寧を滅ぼし、後に「第一尚氏王朝」と称される王朝を樹立（1406年）して10年後であった。

そんなある時、今帰仁城の將軍・本部平原（もとぶ たいはら）は、このままでは何時か中山に攻撃を仕掛けられるからと、攀安知に中山攻略を進言した。

本部平原を心よく思っていなかった羽地、国頭、名護などの諸按司は、中山王の思紹に本部平原挙兵の情報を密かに伝えたことから、巴志が北山討伐に向かう切掛けを作ったという説もある。

北山の本拠地である今帰仁城は、要害の地にあって攻略するに生易しい相手でなかった。しかも第3代王の攀安知は勇猛果敢で、戦えば無敵との噂が高く、攻めるに勝算あったかどうか分からないが、不退転の決意だけは欠かせなかっただろう。

新里恵二氏の「沖縄史を考える」139頁の記述から、北山攻略と攀安知最後の様子を要約してみる。



今帰仁城想像図

北山の兵は、王の攀安知を含めて剛勇の士であり、必死に防戦したので中山軍は攻めあぐねていた。そこで巴志は謀略を巡らし、本部平原に賄賂を贈って裏切りを約束させた。

翌日、平原は攀安知に言った。『久しく出て戦わないと、敵はわれわれを

卑怯だと笑うだろう。それで王と私とで、代わり番に出て戦おうはないか』と。

進言を真に受けた攀安知は、先ず平原に城を守らせ、自分は兵を率いて城を出て戦ったそうです。巴志はこれを見て、軍を二分し、一軍は、かねて調べておいた西南の陰所から城内に攻め入らせ、もう一方の軍勢は場外の攀安知を迎え撃った。

攀安知は勇戦奮闘して中山軍を追撃したが、ふと振り返り見ると城中から天に突き上がるような炎が昇っていた。大いに驚き引き返すと、城門には平原が刀をひっさげて立ち、大音声をあげて言うには、『汝は無道で民をしいたげた。私はすでに中山に降ったのだ』と。

はじめて平原の裏切りを知った攀安知は、おおいに怒り、格闘数合、平原を真っ二つに切り捨てたそうです。

城中には、攀安知が日頃から守護神としてあがめていた霊石（イビガナシ）があったそうです。この日、攀安知は力がつきはて、今わ（死にぎわ）と思い定めたか、その石を大声叱咤していうには、『余いま死す、汝、あに独り生きんか』と。剣をふるって石を切り、自ら首をはねて死んだ。

となっている。

しかし、新里恵二氏「沖縄史を考える」と史実はいささか違いがあるようだ。

奸臣の平原を切って捨てた剣は「千代金丸」（ちよがねまる）といっ、攀安知は守護の霊石に切りつけ、自ら首をはねて自害しようとしたのだが、主の命を守る霊力が込められた刀では死にきれなかった。近くの重間（志慶間）川に刀を投げ捨ててから、脇差でもって割腹（切腹）し絶命した。

後にこの刀を拾い上げた住民が、中山王に献上したという。名刀として後々まで琉球国王尚家伝来の「三振りの宝刀」の一つとして保管され、平成18年（2006年）歴史文書類を加えて「琉球国王尚家関係資料」として国宝に指定されている。

余談ながら、刃渡り71.3センチ。刀身は平造りで無銘。刀文などから刀身は日本製と推定され、柄頭など他の部分は琉球で作直された独特な形式が見られる。

なお、「三振りの宝刀」他の2振だが、一つは「北谷菜切」（ちゃたんなきり）で「青貝微塵塗腰刀拵、刀身無銘で、もう一つは「冶金丸」（じがねまる）で、「筑紫から来た長脇差」との伝承がある。



また、千代金丸が手金丸であるとする一説もあって、その形状や刀身の作成時期などから、千代金丸と治金丸の名前が入れ替わった可能性も指摘されている。

下の写真は、独立行政法人国立文化財機構監修『日本の美術 533号 琉球の金工』画像「千代金丸 治金丸 北谷菜切」より転載した。



▲第7図 金装宝剣 千代金丸(那覇市歴史博物館)

柄を金蘭で包み鶯茶糸を巻くのは日本の手法だが、鞘全体に金板を張り、金製柄頭と竹節形鐙を装着し金線を巻くという柄の造作は他に類をみない。一部に日本製の金具を用いつつ、総体に琉球で仕立てられたもの。中の刀身は、1416年の中山との戦いに敗北した山北王の奉如がこれで自害して、尚家の手に渡ったと伝える。柄頭に刻む「大世」の二字は、尚泰久王の神号「大世王」と見られ、千代金丸が尚家に渡った半世紀後に拵が調えられたことになる。



▲第8図 黒漆塗脇指 治金丸(那覇市歴史博物館)

宮古島の豊見親玄貞が1522年に中山王へ入貢し献上したものと、1500年の中山による八重山オヤケアカハチの乱平定を慶賀し、宮古島の玄雅夫婦が献上したとも伝える。尚真王の八重山平定と、これに関わった宮古の豪族仲宗根豊見親の入貢という、第二尚氏にとっての政治的メモリアルとして伝来した脇指である。室町時代後期の日本の刀拵の形式を踏襲し、伝承と符合する。鐙と大切羽は千代金丸と同形式であるが、こちらの方が格段に作行きが良い。



▲第9図 青貝螺鈿鞘腰刀 北谷菜切(那覇市歴史博物館)

首里の北方、北谷領主の家に伝わった腰刀といわれる。合口式拵の鞘はごく細かな方形の切貝を用いた独特の螺鈿を加へ、柄には較度様に打ち出した金板を貼って、金具回りに世伝の巻糸や木杵めくとき表現の葉を彫り出すなど、奥や内な琉球の造作をみせる。拵と鞘々の部には刻んだ「天」字や数形・分銅形などの記号は、琉球王府工房内で各々を製作した担当者(もしくはグループ)の記号だった可能性もある。



では、堅固なはずの今帰仁城はなぜ中山の手により陥落したのか。中山は、やはり群を抜いて強かったのかという課題が残る。

同じく新里恵二氏の「沖縄史を考える」(142頁～)によれば、三山時代の約100年間に、中山は北山を70余回にわたり攻めたが、一度も勝てなかったと記されている。それが1416年に勝利した原因として次の点を指摘している。

- ① 沖縄本島の中南部が文化的中心地となり得たのは、土壌がよく農業が早くから定着し、北山に比較して民の生活が安定していた。
- ② 三山時代の中国との交流について、入貢は中山42回、南山24回、北山11回。留学生(官生)の派遣は中山20人、南山4人、北山はなし。これらは、回数や留学生派遣の状況から見て、中山の富強度は他山に比べ群を抜いていた。
- ③ 中山は経済的、文化的な先進性によって培われてきた人間集団であり、一方北山は歴史的な後進性によって育てられた人間集団であった。その差は、近代化へと進む時代変化への対応能力の違いとなって現れた。
- ④ 巴志は、首里城内に池を掘り、樹木を植えるなど庭園を遊覧の地として開放した。中山における一定程度の生産力の増強は、自然に対する支配力の高まりとなり、視野の広がりとなった。一方、科学的な思考ができない、呪術的な考えに固執していた北山との相違となった。

以上のような違いは包括的な内容差となり、70余度戦って勝てなかった相手を倒す機が到来したのであろう。

ただ、70余回中山が戦い勝てなかったことについては、これは真実に戦った結果とは考えられない。部分的な小競り合いなどが大部分であったと推定される。

(18) 南山の攻略と琉球王国の完成

北山を陥落させて5年後の1421年、初代王の思紹が死亡すると巴志が第2代王に即位し、その翌年、南山攻略を開始した。ここに第一尚氏と記載したが、当時は「尚」の姓は未だ賜っていない。明国第5代の宣徳帝(せんとくてい、在位:1425~35年)から「尚」姓を授けられたのは1430年である。但し、記述を進めるにあたり以後は「第一尚氏」「尚巴志」など便宜用いていきたい。

南山の大里(おおさと)王統は、前期は現在の南城市大里。後期は現在の糸満市北部の島尻大里を本拠地とした。

時の南山王は第4代の他魯毎(たるみい、生年不詳~1429年。在位:1414~29年)で、1743~45年に琉球王国の正史として編纂された史書『球陽』によれば、第3代王の汪応祖(在位:1402~13年)の長子とある。汪応祖が実兄の達勃期(たふち)に殺害されたため、諸按司と協力して他魯毎が達勃期を倒した。1415年、明の冊封を受け山南王に即位している。しかし、他魯毎は横暴な王で、政治を省みず酒色に耽り、民衆や按司たちに対し酷薄な王であったと伝えられている。

北山の攀安知は「無道で民をしいたげた」と。他魯毎の場合なら「横暴な王で、政治を省みず酒色に耽った」と後になって書き残されるのは、敗者側の支配者は『そん

なに悪かったのか。それなら仕方がないさ』と伝え残される。「勝てば官軍、負ければ賊軍」譬えのとおり、時代が違っても国が違っても、いずこにも見られる歴史記載の傾向といえる。

1429年、激しい戦いだったとの記録もないまま、巴志によって南山は滅ぼされ、ここに山南王国は滅亡した。

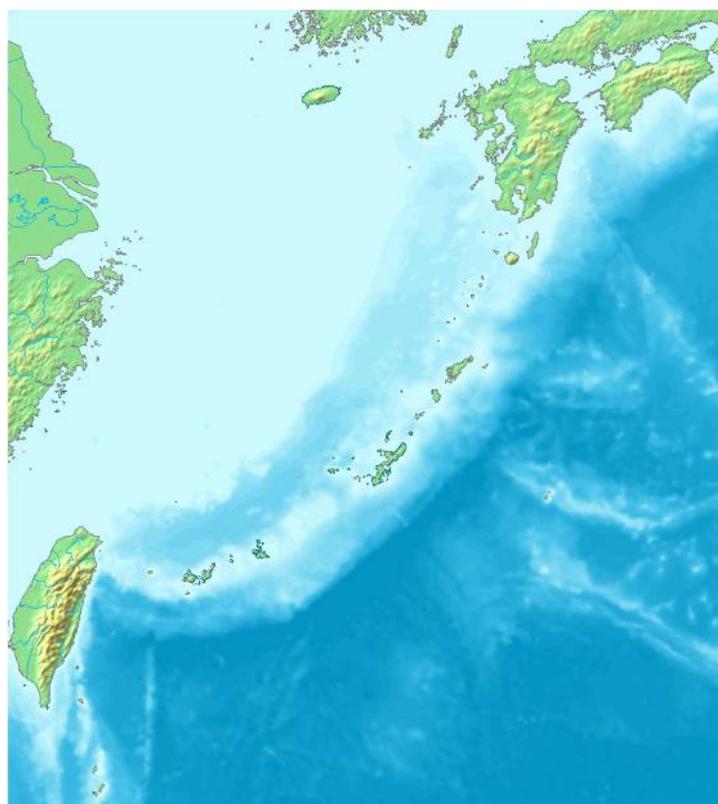
三山対立のはじまりから約100年、南山王の他魯毎を滅ぼして三山統一は完成した。右図のように第一尚氏王統による琉球統一王朝で、右の上下二つの地図を重ねて見ていただきたい。

北は奄美諸島から、南は台湾にほど近い与那国島に至る広範な列島群を支配して従属させ、後に第一尚氏王朝といわれる琉球王国の誕生であった。

小按司から身を起し、大きな野心を抱いた尚巴志の、ドラマチックな大仕事の完成であった。

巴志の在位中に、首里城を拡張整備し、王城にふさわしい城とすべく、城域内の安国山に花木を植え、中山門を創建し外苑を整備するとともに、那覇港の整備を進め、中国をはじめ、日本、朝鮮、南方諸国等、海外諸国との交易を盛んに行い、琉球国繁栄の基礎を築いた。

巴志が1439年に67歳で世を去ると、跡を次男の尚忠（1391～1444年、在位：1439～44年）



が第3代王に、尚忠の没後は世子の尚思達（1408～49年、在位：1444～49年）が第4代王に巴志5男の金福（1398～1453年、在位：1449～53年）、第5代王に巴志7男の泰久（1415～60年、在位：1453～60年）、第6代王に泰久3男の徳（1441～69、在位1460～69年）と続く。

しかし、徳の時代、金丸（1415～76年）によって新王朝（第二尚氏）が立てられ、第一尚氏王朝は63年、6代をもって消滅する。

（つづく）

今月の参考文献等（発行年月は著書に記載のまま）

- ・ 宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和43年11月26日初版、日本放送出版協会発行
- ・ 新里恵二著「沖縄史を語る」、1970年9月1日初版、株勁草書房発行
- ・ 池田奉秀著「古流現代空手道集義第一巻」、昭和50年7月25日初版、日本空手道常心門出版部発行
- ・ 喜納大作、上里隆史共著「琉球王国のすべて」、2012年6月20日初版、株河出書房新社発行